哲學研究
第四百二十一號
第三十六卷
第十一冊

ディルタイの生命の哲學

石田仁

一

十九世紀における生命の哲學の擡頭は直接には、ヘーゲルにおいて完成したドイツ觀念論の哲學に對する反抗であつたが、それは更に遠くプラトン以來の西洋理性主義の形而上學のもつ超越論的性格に對するアンティテーゼとしての意味をもつものであつた。現實的世界の根據を普遍概念の實體化にもとめ、更にかゝる概念の必然的聯關から世界の發展過程を說明しようとする哲學體系においては、生命は畢竟そのあり場所を喪失するほかはない。生命は常に自らの內から生きるところにある。現實の彼岸に想定されたいかなる理念も實體も、それらが生命にとつて意義あるものとなるのは、それらが生命の根源として內實として生きられることによつてである。生命はこのことをなしうる根源的力をもつ。この力によつていかなる形而上學體系もいはばその根柢から爆破されるのである。このことは同時に生命が常に未來に對して開かれてゐること、生きるための限りない自由を要求することである。生命の未來、その自由を鎖す思想體系に對して生命は本能的に反抗せざるをえない、かかる體系は生命の生きる場所を鎖すことによつて生命を虛無感と倦怠におとしいれるからである。從つて生命の哲學にとつては、その思想が嚴密な普遍妥當的學の性

格をもつことよりも、それによつて人間の生命がその全き充實、リアリティーに生きうるか否かが一層重要である。生命の哲學が、生命の全き表現であるところの文學に親近さをもちその表現が非體系的である理由もそこにある。そしてこのやうな思想傾向の現れは、轉換せんとするあらゆる時代に共通の特徴であつた。「特に體系的思惟の時期が終りを告げ、その時期に妥當した生活價値が人間の變化した狀況にもはや適應しなくなり、微細に仕上げられた概念的世界認識が、新に經驗された諸事實にもはや應へられなくなつたとき、このやうな思想家が登場して哲學の生命における新な日を告げたのである。」(V, 389)* そしてヘーゲル以後の十九世紀はまさしくこのやうな時代であつた。人々は形而上學の概念的被覆を脱ぎすてて、益々自由に獨立的に生命のすがたを語らうとする。ショーペンハウエル、リヒアルト・ワグネル、ニイチエ、トルストイ、ラスキン、メーテルリンク等の影響力は、その文學的表現のうちに生命の意味を決定的にいひ表はさうとする意欲にもとづいてゐる。

* 括弧内の數字はディルタイ全集 (Wilhelm Dilthey's Gesammelte Schriften) の卷及び頁を示す。

生命の哲學はこのやうにして、未來に對する關心の强さの故に、過去の歴史に對して批判的である。生きるためには過去との袂別が必要だからである。我々はこのことの最も尖鋭な主張をニイチエに學んでゐる。しかし批判の强さは生命の單なる野性においてはありえない、そこには單なる破壞があるにすぎぬ。生命の批判力は、生命が展開しうるあらゆる可能性を自己の内部に見出し、それを自己の力として自覺する廣さと深さのうちに見られるのでなければならぬ。「人間性がその現實性と力とにおいて、卽ち人間存在の生きた可能性の豊かさにおいて自己を所有しようと思ふならば、そのことは歴史的意識においてのみ可能である。人間性は自己自身の最も大いなる現れを理解しつつ自己の意識にもたらさねばならぬ。」(VIII, 166) いひかへれば、生命は過去の歴史に對して盲目でなく、歴史を自らの過去として、その根源からこれを包み超えるものでなければならぬ。そしてまさしくディルタイの生命の哲學が十九世紀の思想においてもつ獨得の意義は、生命が常に歴史における生命として捉へられ、生命の自覺がその中に歴史

的意識の地平を開いてゐるところにあつた。ディルタイの多面的な資質は、十九世紀中葉の、歴史學とそれに媒介された精神諸科學の確立が頂點に達した時代的環境のうちに豊かに開花し、歴史的意識はディルタイの思想の血肉をなすものとなつた。「人間が何であるかは歴史のみが語る。」(VIII, 224)「人間は歴史においてのみ自己を認識する、決して内省によつてではない。」(VII, 279) 同時に、「歴史の價値に對するあらゆる最後の問ひは、畢竟、それにおいて人間が自己自身を認識する、といふことのうちに、その最後の解答を見出すのである。」(VII, 250) ここでは、歴史を知ることは歴史を對象的存在として知ることではない、歴史において自己を知ることにほかならぬ。ディルタイにとつて歴史的ならぬいかなる生命もなく、その生命の哲學は、その隅々にいたるまで歴史的自己省察 (Geschichtliche Selbstbesinnung) の成果であつた。

二

このやうにして、ディルタイの生命の哲學を特徴づけるものは、歴史的實在としての生命の彼岸に想定されたあらゆるものを生命の中に見ることによつて、生命を生命そのものから、實在を實在そのものから理解しようとする内在性 (Immanenz)、あるひは此岸性 (Diesseitigkeit) の原理であつた。それはディルタイが、ルネサンス以來、ブルーノから啓蒙時代を經てゲーテにいたる發展のうちに見出した「大いなる理説」であつた。「我々の時代の最も一般的な特徴はその現實感 (Wirklichkeitssinn) であり、その關心の此岸性である。」(VIII, 194) しかるに從來の形而上學の諸體系はもとより、經驗的事實に忠實であることを標榜した經驗主義あるひは實證主義の哲學も、この要求に應へるものではありえない。「私の哲學の根本思想は、未だ曾て全き充實した壞されない經驗が、從つて未だ曾て全き充實した實在が、哲學的思索の根柢におかれてゐない、といふことである。」(VIII, 175. vgl. I, 123) とはディルタイの早くからの確信であつた。

人間精神の形而上學的態度の歴史、形而上學の現象學（Phänomenologie der Metaphysik）においてディルタイの明かにしたことは、學としての形而上學の不可能であること、形而上學も歴史的聯關における有限な現象にすぎないこと、それにもかかはらず人間の形而上的意識、人間における道德的・宗教的眞理としての形而上的なものは永遠である、といふことであつた。形而上學は本來、世界人生の最も根本的な諸問題に對する人間精神の戰ひに生れる。しかるにヨーロッパの形而上學の脊柱をなすものは、實在の根據をその論理的聯關にもとめ、實在の聯關を普遍概念の聯關にはめこまうとする理性科學であつた。このやうな理性科學としての形而上學とその思辨的體系的形式においては、それを生み出しそれを體驗する生きた力はその中から消失してゐる。人間精神に對する形而上學の力は次第に減退し、「形而上學の諸體系は崩壞した」（V, 11）のである。しかしこのことは、形而上學の歴史に表現された人間精神の努力のすべてが無意義である、といふのではない。特にドイツ觀念論の哲學は、ディルタイがそこに自己の思想の源を見、自らをその後繼者と考へるものであつた。ドイツ先驗哲學は、ライプニッツ以來ドイツ文化のうちに發展した精神の深奥への方向に生れた偉大な哲學的運動であつた。この方向において精神の創造的力が自覺され、その諸概念に活動的、發展的性格が與へられることによつて、歴史的世界をその生きた聯關において理解する道が開かれたのである。「哲學は、世界の謎を言表し、この世界のあらゆる文化の根柢に横たはる現實的思想を敍述しようと試みたこれらの思想家（フィヒテ、シェリング、ヘーゲル）の傍を默つて通りすぎてはならぬ。殆ど半世紀の間、かれらは何よりも我國民の教養と學的精神を支配した。もしこの國民がかれらの思想の世界を全く無内容と考へるならばそれは自分自身を尊重せぬものといはねばならぬ。」（V, 13）しかしここでも理性における認識主觀は、その創造的活動における生命を全體的聯關において把捉せしめることができなかつた。ここでも哲學は、古き理性科學としての形而上學の傳統の羈絆を脱することができなかつたのである。哲學の對象はもはや、現實を超えた何らかの實體や理念ではありえない。形而上學の對象は現實の彼岸にではなくして生命のうちにある。いはゆる超越的なものへの方向

は、人間心情における宗教的・形而上學的深みへの動向にほかならない。哲學は從來の形而上學の「誤れる對象性」(VIII, 210) を去つて、實在そのものの中に、その形而上的意義をたづねなければならぬ。そのとき過去の形而上學的諸體系のもつ意義も、その根源から全面的に理解されるであらう。これが、ディルタイのドイツ觀念論の諸研究、就中ヘーゲルの研究をみちびく意圖であつた。

宗教についても同樣のことがいはれる。神學者として出發し、眞理に對する情熱的衝動の幾年かを宗教哲學と神學の研究に捧げたディルタイのとりあげた問題は、ヘーゲルの論理主義、自然科學的唯物論や決定論に對する宗教的眞理の擁護であつた。しかもディルタイの獨創性は、より高き生命の確信を何らかの超越のうちに基礎づけるのでなく、決定的に此岸の世界にとどまり、人間存在そのものの生きた經驗の中にそれを獲得しようとしたところにあつた。宗教的なものも最早現實の彼岸の超越的對象としてでなく、生命の經驗における宗教的深さとして追求されねばならぬ。そのとき宗教もまた形而上學の繫縛から解放されて新な生命をもつことができる。ここでもディルタイを導いたのはシュライエルマッヘルであつた。先驗哲學における事物の永遠の聯關、普遍的精神、自然の魂、との合一を感ずる自我の體驗に導かれてシュライエルマッヘルは、意識の漸次的高揚によつて、精神の奥底に、事物の眼に見えぬ聯關と合一する道を見出した。宗教は個別的自我に對する宇宙の影響によつてよび起される直觀であり、感情である。この影響は、我々の個別的存在と宇宙との融合の體驗をよびおこし、そこに我々は無限者の實在を覺るのである。「シュライエルマッヘルの宇宙的直觀における最も深い點は、恐らく、この宗教的體驗が自己の中に、諸々の宗教の多樣性に對する說明根據と、それの正當性に對する權利根據とを含んでゐる、といふことである。」(VI, 296) とディルタイは考へてゐる。

さて、我々の知りうる唯一の實在は經驗されることのできる世界であり、啓蒙時代の精神に從つて、どこまでもこの經驗的世界に止まらうとすることが、ディルタイの哲學的思索における支配的衝動であつた。(V, 418) この點に

おいてディルタイの生命の哲學は、どこまでも經驗的事實に忠實であらうとする經驗主義や實證主義と同じ要求をもつ。そこには、「何ものにも欺かれまい」(V, ii) とする精神があるからである。「實在はこれまで、神話的空想や形而上學的思辨の最高の努力が描きあげえたよりも、忠實にその法則を探求する科學に對して、遙かに崇高に且つ豊かに、自己を顯はにした」といふヘルムホルツの言葉は、ディルタイの精神科學研究のモットーであつた。しかし、何ものにも欺かれまいとすることは、實在の前景にとどまること、實在の研究をその現象面に限ることではありえない。そこには認識するところの知的主觀が豫想され、實在はこの認識主觀に映されたかぎりの客觀的現象の世界となる。そこにいはゆる現象主義 (Phänomenalismus) が生れる。現象主義は意識の主知的把捉の結果である。そこでは實在の深い相は消えうせる。この點では、經驗主義や實證主義の多くが、合理主義的形而上學と同じ前提の下にあるのである。「經驗主義は、ばらばらにされた經驗、最初から心的生命のアトム的理論的把捉によつて不具にされた經驗を基礎にした。經驗論は經驗とよぶものを取り上げるにしても、この經驗の中には全體的人間は嵌込まれることができない。このやうな經驗に限局された人間は一日と雖も生きる力をもたないであらう。」(VIII, 175) また實證主義は、自然科學的認識を學の發展の最高段階におくことによつて、「精神の世界を外的世界の框に嵌込まうとしてこれを破壞した、これが實證主義の制限であつた。」(V, ii) その結果かれらは、根源的實在の存在を否認するか、その內容を認識不可能とするか、するほかはなくなるのである。經驗主義や實證主義は、それらが合理主義の單なる反對的傾向にとどまるかぎり、ひそかにその中に、根源的實在への哲學的洞見を曇らせる形而上學や獨斷論を含んでゐるのである。コント、バックル、ミル、スペンサー、及びその後繼者達は、ディルタイにとつては、未だ充分に經驗的であり實證的であるとは思はれなかつた。ディルタイはかれら以上に經驗的であらうとするのである。そして「經驗論的立場を徹底することによつて客觀性に到達しよう」「我々の現象の世界に深まることによつて客觀性を所有しよう」(V, iii) とするのである。その爲には經驗論からして眞の經驗が解放されることが必要である。卽ち、「Empirismus で

なくして Empirie」(V, LXXVI)が、Positivismus でなくして「人間性の Positivitäten」(II, 498)が取上げられなければならぬ。そのとき實在は、實證科學によつては達せられない形而上學的・宗教的深みを藏したものとして現れるであらう。哲學はこのやうな「純粹經驗における實在」(I, 123)に立脚し、その學的分析をめざさなければならぬ。その時、最も經驗的であると同時に形而上學的でもあるやうな哲學の立場も成立するであらう。哲學はこの意味で「現實的なものの學」(VIII, 176)である。

ところでディルタイはミルの論理學にふれて「偏見にみちた獨斷的經驗論に代つて、眞の經驗的態度はドイツからのみ起りうる」(V, LXXIV)といふ。眞の經驗的態度は、實在の全體的聯關の把捉をめざすものとして、同時に形而上學的・宗教的態度でもあるであらう。まさしくそれがドイツ精神の傳統であつた。學を表はすドイツ語の Wissenschaft が英佛の science の概念と異つた響きを傳へる理由もそこにある。ディルタイにおいては、このやうな實在の學はまさしく精神の學(Geisteswissenschaft)とよばれなければならなかつたのである。(I, 5f.)

このやうにして、超越的實體によつて制約されず、實證主義によつて淺薄にされぬ經驗的實在が、哲學的思索の根柢におかれねばならぬ。と同時に、それに相應しい認識の主體が確立されなければならぬ。たとへばカントの抽象的思辨、經驗論者の經驗は、哲學のオルガノンではありえない。「ロックやヒュームやカントの構成した認識主觀の血管の中には、現實の血は通つてゐない、單なる思惟活動としての理性の稀薄な液が流れてゐるにすぎない。」(I, Vorrede, XVIII)そこには貧しい世界像と人間像が結果するにすぎぬ。經驗の哲學の必然的な完全な根柢となりうるのは、人間性の全體の中にのみあるところの全き現實的な知性でなければならぬ。ところで「この全き現實的知性は、その中に、宗教や形而上學や無限者をその現實性の一面としてもち、知性はこの側面なしには決して現實的でもなく活動もしない。」(VIII, 176)要するに我々の全人的存在、表象し情感し意欲する我々の生命の全體が認識手段とならねばならぬ。そのとき始めて、完き充實した實在が捉へられるであらう。このやうな認識主體が確立されると同時に、

實在はその生命性を顯はにし、その認識はやがて實在そのものが自らを語る言葉となるであらう。

實在を生けるものとして理解し、實在そのものをして自らを語らしめること、そこに學の眞の客觀性が成立する。まさしくそれが歷史的意識の要求するところであつた。ディルタイの生命の哲學は、その中に歷史的意識の地平を開くことによつて、どこまでも學としての哲學の成立を期さうとする。こゝにもディルタイの生命の哲學が、十九世紀初期のショーペンハウエルや、それにつづくニイチエの生命の哲學との相違がある。ヘーゲル以後、ショーペンハウエルの强力な影響の下に現れた生命の哲學の課題は、どこまでも方法的學の內部で解決されねばならぬ、そしてこの目標への道は哲學と精神諸科學との結合、哲學が歷史によつて滲透されることである、とディルタイは考へる。畢竟、學の客觀性を維持しようとするかぎり、哲學は歷史的意識の批判に堪へえなければならぬ。

三

さて、生命あるひは實在が私にとつてそこにある獨得の仕方は體驗（Erleben）である。體驗において實在は內面的に激しく捉へられる。それは、與へられた狀態における心的實在全體の覺知（Innewerden）である。體驗內容は、知覺されたもの、表象されたもののやうに、私に對立するのではない。それは外面的に與へられてあるものでなく、實在としての體驗內容は、我々がそれを覺知することによつて、卽ち私がそれを何等かの意味で私に屬するものとして直接にもつことによつて、存在する。從つてここには未だ主觀、客觀の對立はない。「體驗內容の意識とその性質、それが私にとつてあることと、その中で私に對してあるものとは、一つである。體驗內容は客觀として把捉者に對立するものでない、私に對するその存在は、その中で私に對してあるものから區別されない。」（VII, 139）いはば體驗においては在り方が存在そのものである。從つてそれは盲目的でも無意義でもなく、あらゆる思惟作用の根源として意識によつて滲透されてゐる。しかも體驗はその中に無限の深みを藏し、思惟はその背後に溯ることができない。生

命には、それに超越する如何なる根據（Grund）もなく、根據は生命そのものの無限の深みにほかならない。從つてそれは、思惟にとつて測りがたく、底知れない（unergründlich）のである。「この實在は我々の思惟に通じうるものであり、その生命性において意義をもつ、しかも測り知られない・・・生命は思想的であり、同時に、究めがたい。それは詩人、豫言者、宗教家、歴史家に顯はである・・・我々は各自の仕方でそれを表現しようとする。しかし無限者はいひ表はされることができない。」（V, LIV）

このやうな體驗の特徴は、何よりもそれがパトス的であることである。ディルタイは、その中心をなすものは諸々の衝動と感情の束（ein Bündel von Trieben und Gefühlen）であるといふ。これが我々の生命の機構における發條である。我々は單に認識する主觀としてあるのではない、常に表象し情感し意欲する全體的人間としてある。この全體的人間の直面するのは、本能作用、生命の誕生、人間の闘爭、人生の幸福とその頼みがたさ、道德的規範と罪の意識、宇宙の永遠性と生命の果敢なさ等の世界人生の根本問題、即ちその謎である。これらは冷かな知性の問題でなく、異樣なもの矛盾したもの不可思議なものとして、我々の存在をその根柢からゆさぶる問題である。體驗は常に情意的性格をもつ。このやうな體驗についてその眞理性を問ふことは無意味である。體驗はそれ自身確實であり、リアルである。あらゆる實在性に關する問題はここに立歸らねばならぬ。我々の自己の存在がこのやうな體驗において直接に確保されるやうに、外界の實在性も、主觀に對する客觀的現象としてでなく、衝動的生命に對する抵抗として、阻止として、要するに生命の聯關を構成するものとして、始めて基礎づけられる。これは外界の實在性に關するいはゆる論證ではない、論證はもともと不可能なのである。自己とそれに對して外的なものとの離在といふことは、經驗の根源的事實であり、思惟はこの事實の背後に溯ることができない。體驗の事實を外的世界の認識の聯關に嵌込まうとしてはならぬ、却つて外界の認識は、その諸範疇を生命の根源的體驗から汲みとつてゐるのである。「以前は人は世界から生命を捉へようとした。しかし生命の理解から世界への道があるだけである。」（VII, 291）

さて、心的生命は、外的環境との交渉のうちに種々に分肢し、この分化において全體的聯關をなしてゐる。ディルタイはこれを構造聯關（Strukturzusammenhang）とよぶ。それは、發達した心的生命において、樣々の性質をもつ心的事實が規則的に、內的に體驗されうる關係によつて、互に結合されてゐるところの秩序である。諸々の衝動、諸々の感情がその中心にある。諸々の印象は、心的生命のこの中心から與へられる感情的色合によつて注意の中に引き上げられ、知覺及びこれと記憶や思惟系列との結合が行はれる。我々は統覺し區別し結合し判斷し推論する。この對象的把捉の作用に、生存の高揚、苦痛、恐れ、怒り等の感情が結びつくことによつて、我々の存在の一切の深奧が動かされる。感情のこの多樣性にもとづいて、生活の瞬間の價値、外物が我々の生命と衝動の體系に對してもつ價値は、次第に正しく評價されてくる。ここから更に、苦痛から希望へ、希望から欲求への推移、或は他の情緒の諸狀態の系列のうちに、意志活動が成立する。我々は合目的々意志活動によつて環境を變化させ、或は意志の內的活動によつて、我々自身の生命の過程を我々の欲求に適合させようとする。こゝでは、永續的な目的や規範の選擇が行はれる。これが人間の生命であり、この聯關のうちに、知覺、記憶、思惟過程、衝動、感情、欲求、意志活動が、さまざまの仕方で結合してゐる。しかもこの場合、一つの狀態から他の狀態への推移、一から他への働らきかけは內的經驗に屬してゐる。卽ち、構造聯關そのものが體驗されるのである。心的生命は、このやうに體驗される聯關として、常に複合的であり、多面性における統一である。それはいづれか一つの概念、一つの範疇によつて統一的に把捉されることを拒む。却つて、あらゆる表象や概念は、この聯關に位置づけられることによつてその存立と眞理性を維持する。

心的構造聯關には目的論的性格が屬する。心的生命が、衝動の滿足を求め苦痛をさけようとして、自己にとつて價値あるものを經驗するとき、この經驗は、注意における印象の選擇及び加工となり、意志活動における目的の選擇、手段の探求となる。そして分化した諸々の活らきとそれらの內面的相互關係が、生命の充實を求めようとする目的に導かれることによつて、心的生命は發展する。心的生命は、根源的に發展聯關であり、構造聯關はいはばその橫斷面

をあらはしてゐる。發展は、心的生命が自己をより明瞭に精細に組織すること、それによつて體驗が次第にその可能性を汲みつくさうとすることである。ところで、私の現在の體驗は、その中に含まれた契機にもとづいて、過去におけるそれと關聯ある體驗に結びつき、他の契機はまた未來へ導いてゆく。現に體驗されたものの、想起された過去のものに對する、同樣に配慮や決意に現はれる未來的なものに對する關係によつて、私は或は後方へ或は前方へ牽引される。この系列に沿ふ牽引（Fortgezogenwerden）は、次々と體驗されることを求める新な分肢の要求にもとづく。それは單なる意志ではない、事態そのものに制約された體驗の展開である。過去と未來とは、現在の體驗に對してある意味で超越的でありながら、このやうな關係によつて現在に結びつき、一つの全體を構成する。現在は、記憶において過去の表象を、想像や決意において未來の表象を含む。「かくして現在は過去によつて充たされ、未來をその中に抱く。」（VII, 232）時間におけるこのやうな聯關が生命の過程（Lebensverlauf）にほかならない。生命の過程は、繼起する個々の體驗のよせ集めでなく、あらゆる部分を統一する全體である。現在の體驗內容を超えてゆくところの、體驗のこの心的聯關への完成は、事態そのものの法則性に從つて行はれ、その一歩一歩に生命の充足感がともなふ。しかしこの充足感は常に體驗の汲みつくし難さに由來するところの不滿と交代する。このやうにして心的生命の發展は無限の過程である。

心的生命は、このやうにして、その發展と共に、それの諸條件に適合するところの「强固な聯關」「いはば心の形態（Gestalt der Seele）」（V, 176）を作り出さうとする傾向をもつ。心的生命の發展と共に習性化したこの聯關を、ディルタイは收得聯關（erworbener Zusammenhang）とよぶ。「歷史の仕事は分化であり、分化は同時により複合した諸關係をもたらす。心的生命の收得聯關は、益々高度に纖細に複雜に形成された諸關係を含み、個々の機能はその中で分離されて益々自主獨立的となる。」（VIII, 16）それと同時に、個々の意識作用の出現及びその性格は、この全體的收得聯關によつて制約される。收得聯關は、現在の體驗における過去の集積であると共に、未來の活動を規制

する力となる。心的生命は自己を展開しつつ自己を固定する。それは生命が自己自身を確實な所有にもたらすことにほかならない。この聯關の背後は生命の底知れぬ深みである。收得聯關は、この不可測な生命のいはゞ結晶である。その特徴は、それを構成する各分肢間の均衡（Gleichgewicht、現實との調和（Harmonie）にある。それは我々の自己性（Selbigkeit）の確立である。その背後には何ものもなく、この均衡を失ふことは自己を失ふことにほかならぬ。現實の克服し難い諸條件を超越して、諸々の心像とその結合を自由に形成しようとする詩人の構想力が、狂氣や幻覺と區別され、却つてそれによつて生命の新な相を顯はならしめる所以は、この收得聯關の規制力が維持されるところにある。收得聯關は、生命の均衡を脅かす世界人生の謎に對して、心的生命のなしとげる最高の成果である、といはねばならぬ。「一切の人間的發展は、このやうな聯關、即ち獨立し、生存の諸條件に適合し、それ自身において完結し、有意義であるやうな聯關を形成する以上のことをなしえない。…性格とは、この完成の一面的ではあるが最も重要な側面をなす。地上のあらゆる實在のうち、この心の形態は、最高のものとして現れる。この意味でゲーテは、人格を地上の子等の最高の幸福とよんだのである。」（V, 220）

ところで、心的生命の發展は、その目的聯關の故に、次第に高度の分化と結合とをもたらし、その中に向上的系列の聯關を示すのであるが、生命の各時期は單に後の時期のための手段と見做されることはできない。「生命の各時期は、その特殊の諸條件に相應して、生氣ある感情、生存を高め擴げる感情の充實に生きることができるからである。否、生命は、そのあらゆる瞬間が獨立的價値の感情を以て充たされてゐるやうな場合、最も完全な生命であるであらう。」（V, 218）生命のそれぞれの時期は、それ自身全體的聯關をなすものとして、それ自身の充實に生きることができ、獨自の意義をもつ。生命はその歷史的發展において、いはゞ自己の分身をつくりつつ展開する。それらの形態は、歷史的世界において動かし難い位置を占めるのである。生命の多面的性格は、ここに到つて最も明かである、といはねばならぬ。それは生命の無限の深さに由來する。しかし不可測であるが故に生命は無限に發展するのである。

四

さて、「意識性を高め、我々の營みを妥當的な、充分に基礎づけられた知識に引上げることに、我々の內面の强固な形態をうるための本質的條件がある。」（V, 375）といふことは、生命と知識との間の基本的關係に屬する。從つて、その發展において强固な聯關を形成しようとする心的生命の傾向は、その全面的、統一的自覺において始めて完成される。人は生命を脅かす世界人生の諸問題に對して、意識性の高揚、普遍的知識によつて、心的聯關を强固に形成しそれを確實な所有にもたらさなければならぬ。この傾向は藝術において、宗教において見られるのであるが、それは生命の諸問題の普遍妥當的概念による解決をめざす哲學にまで進まねばならぬ。哲學は、實在の認識、生活上の價値の評價、意志行爲の決定において、普遍妥當的原理を指示することによつて、生命に確固たる據りどころを與へようとする。この意味で哲學は生命の一つの機能として、藝術や宗教と生きた聯關をなすところの世界觀あるひは人生觀である。偉大な哲學者達の若き日の苦闘は、すべて世界人生の謎との戰ひであり、世界觀・人生觀を形成しようとする努力であつた。形而上學の不滅の根がここにある。從つて哲學は、常にその母胎たる生命の體驗に立歸り、そこから新鮮な生命を汲みとらねばならぬ。然るに形而上學は「生命性との關係において考察された世界聯關を、恰もそれがこの生命性から獨立した客觀態であるかのやうに、學的に論究する哲學の形式」（VIII, 51）にほかならない。その結果、形而上學は心的生命の聯關から遊離し、生命に對する力を喪失すると共に、その普遍妥當性の要求は、歷史の發展と共に相ついで現れる諸體系との對立、といふ事實と矛盾せざるをえなくなる。歷史的生命の哲學は、まづ、形而上學の諸體系の發展史的研究によつて、それらがいかにして生命の要求からうまれ、いかなる仕方において生命の諸問題を解決しようとするかを辿り、その根源をつきとめなければならぬ。それは形而上學の諸體系が、いかなる世界觀・人生觀の表現であるかを知ることである。ところで、哲學體系が世界觀として見られるとき、それは歷史的

世界におけるあらゆる生命の現象と同じく、歴史のある時期に誕生し成長し開化しそして凋落する姿を顯はにする。生けるものとしてあることはやがて死ぬるものとしてあることである。そしてこれが哲學の歴史の現實ではないであらうか。

歴史的意識は他のあらゆる意識にもまして批判的である。それはあらゆる哲學體系の根をつきとめることによつてそれを歴史的世界の一定の位置につなぎとめ、その一面性、相對性を曝露するからである。それによつて哲學の生命を形而上學體系の束縛から未來に向けて解放するからである。「歴史的世界觀は、哲學や自然研究がいまだ斷ち切らなかつた最後の鎖から人間精神を解放する女神である。」(V, 9. vgl. VIII, 223) 同時にしかし歴史的意識は、あらゆる哲學體系を世界觀として理解することによつて、それが人間の永遠の形而上學的意識に根ざすことを明かにし、それに生命を與へ、歴史的世界におけるその獨立的價値を證明する。卽ちそれが生命の實在の一面の表現であることを明かにするのである。この意味で歴史的意識は、それが哲學の諸體系に與へた痛手を自ら癒す力をもつ。歴史的意識は過去のすべてから離れてあることによつて、そのすべてを愛惜する精神である、といふことができる。このやうな歴史的意識において、生命の哲學は、過去のあらゆる哲學を自己の可能性の實現として理解することができる。生命は歴史を自らの過去として理解する廣さと深さとをもたねばならぬ。ドイツ歴史學派のうちから成長することによつて、ディルタイの精神の方向を決定づけたところの歴史的意識は、ここにその最も深い意味を顯はにする。それは歴史的自省において、「哲學の歴史を說明可能ならしめるやうな哲學の概念 (ein Begriff der Philosophie, welcher die Geschichte derselben erklärbar macht.)」(VIII, 7) を發見せしめることであつた。自己の哲學をして同時に哲學の歴史を說明しうるやうな哲學たらしめようとすること、これは凡そ歴史に關心する近代の哲學に共通の要求であり、我々はその輝かしい先蹤をヘーゲルの哲學にもつのであるが、ディルタイはこの要求に、歴史的生命の哲學の立場において應へようとするのである。

ドイツ先驗哲學は、カントからフィヒテ、シェリングへの發展において、自我の根柢に深まることによつて、精神の創造的力の自覺に到達し、そこから藝術、宗教、哲學を精神の發展のうちに統一的に理解すると共に、歴史の各時期を絶對的なるものの展開過程として把捉する道を開いた。ヘーゲルに到つてこの方向は更に徹底され、絶對者の展開としての世界聯關は、それが歴史において産出する人間精神の全イデアリテートをその中に含む絶對的生命性となり、それに應じて世界聯關を思惟する諸概念も、このイデアリテートの生命性に充たされたものとなる。イデーの進展をあらはす哲學の諸形態も、歴史の流れのうちにあつて高度に生きたものとして、宗教、藝術、人倫と常に密接に關聯するものであつた。ここに、哲學的思惟の各形態に、哲學思想の全發展からしてその價値を指定すると共に、哲學思想自身に對してはその機能を、人類の歴史的發展の聯關において、他の精神の表現との生きた關係において、規定するといふ課題が成立する。ところでヘーゲルにおける形而上學的精神は、世界聯關を結局は論理的概念形式と、これらを相互に導き出す方法とのうちに表現されうるもの、と考へる。その結果、自己自身を理解する理性としての哲學のみが精神の發展において最後の言葉を語るものとなり、藝術と宗教とは、絶對精神の低次の段階として哲學の背後にとり殘されることとなる。そして、哲學の歴史における聯關は、體系そのものの論理的聯關に對應するものとされ、この論理的聯關は哲學の歴史のうちに、最も抽象的なものから一歩一歩具體的實在の理解へと、あらゆる體系に内在する矛盾を止揚しながら辯證法的に現れるとされたのである。それは哲學の歴史のうちに、事態に卽した必然的な聯關を發見しようとする最初の企てであつた。理性の諸範疇が思惟によつて相ついで、概念的思惟に引上げられる順序は、世界過程そのものの順序であり、いはば自己自身を意識せぬ世界過程の概念的思惟における反復にほかならない。世界の辯證法は、哲學の歴史が體系から體系へと前進する辯證法のうちに繰返されるのであつた。そしてヘーゲルは、自己の到達した原理を、哲學が歴史において實現しようとする理想と見ることによつて、彼自身の體系を哲學の歴史の絶對的終結として捉へるのである。——ヘーゲルの精神の深い傾向にもかかはらず、その要求と、ヘー

ゲルの形而上學の方法との矛盾は明かであるといはねばならぬ。哲學と藝術、宗教との生きた聯關は見失はれ、世界は概念の體系に嵌込まれることによつてその無限の深みを喪失し、自己の體系に哲學の歴史の終結を見ることによつて生命の未來は鎖される結果となつた。

哲學は世界觀の概念的表現である。そして「世界觀の最後の根は生命である。」(VIII, 78) 從つて世界觀は、常に他の諸々の世界觀と生きた聯關においてあるものとして、それらとの對立關係を脱することはできない。唯一の世界觀は人に生きらるべき世界觀ではありえないからである。哲學的世界觀は宗教的世界觀や藝術的世界觀と相對し、哲學的世界觀の内部にあつても、常にいくつかの主要な類型が對立して、人間精神に對する力を競つてゐる。周知のやうにディルタイは、哲學の歴史を通じて絶えず繰返される基本的類型として、自然主義もしくは實證主義 (Naturalismus od. Positivismus)、自由の觀念論 (Idealismus der Freiheit)、客觀的觀念論 (Objektiver Idealismus) の三つを擧げてゐる。これらの類型は、いづれも世界人生の諸問題に對する人間の基本的態度の在り方、哲學者の生命の體制 (Lebensverfassung) の表現として、他の類型に止揚されることを許さぬ獨立性をもつ。生命は到るところ聯關をなすものとして常に多面的である。Leben ist Mehrseitigkeit. (VIII, 69) 恰もそのやうに、生命の謎を哲學者の個性を通して解決しようとする哲學的世界觀の類型は、この可能性の一つの實現として、實在全體に對するその一面性を脱することができない。それは限られた思惟における宇宙の一面的表現である。「眞理の純粹な光は、我々には、色々に屈折した光線を通してのみ眺められる。」(VIII, 222) 同時に、生命は到るところ全體的聯關であるからして、世界觀の各々の類型のうちには、實在そのものが宿つてゐる。そのかぎり、「眞理はそれらすべての中にある。」(VIII, 223) ただ、諸々の側面が指示する「唯一の眞理」(ibid.) は概念的にいひ表はすことができない。それは普遍妥當的知識の彼岸において、人がただひとり生と死とに向ひ合ふときの問題だからである。それが無限に深いといはれる生命の實在にほかならぬ。もとより多面のほかに一つの實在があるのではない。多面性において一つの實

在がある。

哲學自身の自己省察によつて開かれたこの哲學の世界は、その中に何らかの仕方における發展的構造を示すであらう。哲學的世界觀の類型は、各々その中に實在を宿しながら、實在全體に對するそれの不充全さから生ずる矛盾を克服しようとして、一方その體系の內部組織を完全にすると共に、他方必然的に他の類型をよびおこすからである。それによつて生命の諸問題の解決の可能性が次々と汲みつくされる。哲學の諸體系相互の排除と並存の關係にもとづき、一種の內的必然性をもつて歷程されるこの過程を、ディルタイは「內的辯證法」(innere Dialektik) とよんでゐる。それは歷史が諸體系において遂行する辯證法である。こゝには一種の生命の論理が問題とされてゐるといへるであらう。と同時に內的辯證法は、哲學の歷史的發展過程の深い理解を可能ならしめる。哲學の歷史は、世界人生の諸問題の解決の可能性が、文化の狀況の內部で、哲學者の個性を通して、內的辯證法に從つて歷程される過程である、といふことができる。その際、一時代に與へられた諸問題の解答が、文化の狀況特に經驗科學の進步の段階に制約された範圍內で行はれてゆく過程を見ることによつて、哲學の歷史發展の法則性、合理性を發見することもできるであらう。これらの問題は、晩年のディルタイの苦鬪にもかかわらず、我々はその充分の展開をディルタイに見ることができない。ただディルタイにおいて歷史的意識は、あらゆる歷史現象の有限性の指摘によつて、一方人間精神の解放者であつたと同時に、他方このことによつて人間精神の創造的活動性を高揚せしめるものであつたことは注意されてよいであらう。けだし生命の多面性、歷史現象の有限性の洞察は、同時に生命の不可測性の自覺と結びつく。不可測なること (Unergründlichkeit) の自覺は、生命がそれに超越的なるいかなる根據 (Grund) をもたぬこと、生命がそれ自身において無限の力を藏することを知ることである。そこに人はその自由と高揚とを體驗するのである。このことは人が歷史現象をその根源において理解することによつて可能である。「あらゆる過去の同感的理解は未來を形成する力とならねばならぬ。」(VIII, 167)

未來をもつことは、我々が歴史の途上にあること、生命の意義を最終的に決定しえないことである。「人は生涯の終りを待ち、死の時において始めて、その諸部分の關係が確定されるであらうやうな全體を見渡すことができるであらう。人は歴史の意義を決定するための充分な材料をもつためには歴史の終りを待たねばならないであらう。」(VII, 233) 歴史の途上にあるかぎり生命の聯關は、その部分の「定まり・定まらぬ意義 (bestimmt-unbestimmte Bedeutung)」(ibid.) から構成されてゐる。ここに歴史的意識が哲學體系の完結をこばむ最大の理由がある。ところで、死は、ディルタイにおいては、最も我々の理解をこばむ生命の謎とされてゐる。しかし、現代の實存哲學における人間存在の分析をまつまでもなく、それは現在の生命の形成に無縁ではありえない。ディルタイにおいて絶えず繰返されるところの、生命の時間性に由來する生命の崩壞性 (Korruptibilität) はまさしくそのことの表現である。しかも生命の時間性、その果敢なさは、まさしくそこにおいて生命が聯關を形成し、自己性を確立する場所であつた。「生命の全性格、生命における崩壞性と、しかも同時に生命が聯關を形成しその中に統一(自己)をもつこととの關係は時間によつて規定されてゐる。」(VII, 229) 體驗における生命の充實は同時に生命の果敢なさの自覺である。自己性の確立は、このやうな終末を含んだ世界の中に生命があること、このやうな世界が生命に内在することであるが、ディルタイの特色はそこにおいて生命の超越が語られるこのやうな體驗をも、どこまでも生命の内部に見ようとするところにあつた。ディルタイの業績について、歴史的研究がその理解の豊かさにおいて讃美され、體系的研究がその哲學的深さにおいて不滿を表明される理由も、かかつてその内在性の立場にあると思はれる。　(了)

(筆者　京都大學教養部〔哲學〕助教授)

ENGLISH OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

The outline of such an article as appears in more than one number of this magazine is to be given together with the last instalment of the article

Wilhelm Dilthey's Philosophy of Life

By Shinobu Ishida

The dominant impulse in W. Dilthey's philosophical thinking is "to understand life out of life itself". The characteristic of his philosophy then is that it always approaches life as manifested in the historical world and that it opens within itself the horizon of historical consciousness. Not only metaphysics but also positivism are rejected as merely one-sided conceptual solidifications of the full living reality. His philosophy thus aims to grasp and scientifically analyze such "reality in pure experience" that is at once empirical and metaphysical, only to be internally awared of in our lived experience (Erleben). Life is *gedankenmässig* as well as *unergründlich*. Mental life is a structural system comprising in itself various psychical facts and consequently is many-sided. Philosophy is one of the functions of life which is to solve main questions, i. e. riddles, of life and to elevate human mind to its autonomy; and in this sense philosophy is the conceptual expression of a *Weltanschauung* or *Lebensanschauung*. Philosophic systems stand thus side by side against each other, each expressing one side of the reality of life. The philosophy of historical life, pursuing as it does the genetic law, the structure and the types of *Weltanschauungen*, becomes the "*Weltanschauungslehre*" or the "philosophy of philosophy", which also clears the way for the law of the historical development of philosophy to be made comprehensible.